

ことしの元旦のできごととは忘れられないものになった。正月休みを取り、そろそろ帰宅しようとしていた時、二人の青年が教会を訪ねてきた。夜十時半ごろ。「神父さん、さんげを聞いてください」。二人は親友だという。「先にこいつの話を聞いてやってください。自分にも話さないけど、神父さんだったら話せるぞうだから。ぼくは後で」▼二人にとっては教会に来たのも、神父と話をし

たのも初めて。友達に信徒の子がいて、「神父さんだったら聞いてくれる

地の塩

02. 3

ので、その前にぜひ話しておきたい、ということだった▼「ぼくはダメな人間なんです。悪いと分かってるのにやってしまつ。新しい自分になりたいんです」「具体的にはどういうことなの？」と尋ねた。「女の子のことです。みんな女の子と遊んでいる。軽いノリでセックスしてる。それが当たり前のようになってる。大学生でも金があれば、遊びに行く。こんなのは、ぼくはホントはいやなんです。真剣に愛したいんです。遊びじゃなくて真剣に」▼いろいろな話した。「悩んでいる若者は多い。でも心から相談する相手もないし、場所もない。ここに来て良かった。神父さん、ぼくの経験が役に立つんだったら、だれにでも、全部話していいよ」。二人が帰ると午前零時を過ぎていた。さわやかな気持ちで実家に帰った。彼とは今、メル友です。